

松下 哲也 提出 学位申請論文（課程博士）

『文学、舞台、絵画—ヘンリー・フュースリの絵画における  
キャラクターと物語の造形、およびその理論』 審査要旨

### 論文内容の要旨

本論文は、イギリスの画家ヘンリー・フュースリ（1741-1825）の物語絵画とその代表的著作『画法講義』（*Lecture on Painting*）を中心とするテキストの分析によって、彼の造形理論とその作画方法を具体的に検討し、フュースリを古典主義的理論家である一方、ロマン主義的潮流の中で自己確立し、後代へと継承される物語絵画の先駆者として位置付ける。2000年代以降のフュースリ研究は、彼の業績を18世紀に設立されたイギリスのロイヤル・アカデミーにおけるアカデミー美術の枠組みに限定して解釈してきた従来のフュースリ論とは異なり、啓蒙時代以降発達した舞台美術、演劇、文芸ギャラリーなどを含めた視覚文化の中に位置づけて再評価しようとする趨勢にある。この視覚文化史的研究においては、フュースリは観相学を応用してキャラクター、つまり登場人物の性格や感情の特質を的確に、かつ類型的に普遍的妥当性をもって表現しうる造形手法を確立した、と指摘されている。しかしこれまで、そのキャラクター造形理論と作画方法を詳細綿密に分析した研究はない。本論文は、先行研究を十全に踏まえた上で、フュースリの造形理論およびその表現原理、すなわち作画方法を明らかにすることを目的とする。

第1章「物語絵画と18世紀の美術市場」では、当時のイギリスにおける美術家を巡る展覧会興業と出版産業を概観し、その特徴を指摘する。1769年に設立されたロイヤル・アカデミーは、大陸諸国の官立アカデミーとは異なり、当初から独立採算性の機関として運営されていた。具体的には、アカデミーが主催する年次展覧会の入場料やカタログ販売の収益を資金源として学生の教育、会員の福祉を賄うシステムである。この経営方針は国内の美術展興業の商業性を高め、商業的発展性に着目した版画出版業者ジョン・ボイデル（1720-1804）による、シェイクスピア作品を版画化して展示し、定期購読者を募ることにより収益を上げる「文芸ギャラリー」の誕生を促した。フューズリはこのビジネス・モデルに倣って「ミルトン・ギャラリー」を開設する。これらの文芸ギャラリーでは、物語（フィクション）を連続して展示するため、一枚の絵画に物語を集約したり、異時同図的に配置するという従来の物語絵画の形式を刷新し、連続場面を複数枚に描く新しい表象形式をもたらした。フューズリはこの連作化を実現するための画法の構築を目指すのである。

第2章「物語とキャラクターの理論」では、郷里スイスに在住した青年時代に文学者ヨーハン・ヤーコプ・ボドマー（1698-1783）とヨーハン・ヤーコプ・ブライティンガー（1701-1776）から受けた文献学と詩学の教育、ついで、初めて本格的画家修業を開始したイタリアでの8年間にわたる遊学時代の美術様式研究を詳細に検討する。その上で、ロイヤル・アカデミーの講義録『画法講義』で展開される人体造形論の一部は、フューズリがボドマーやブライティンガーから受け

継いだ「詩的模倣」(poetic imitation) という概念にもとづく論じる。それは、現実にある対象を写實的に模倣することではなく、神による「無からの創造」において、ありうるかもしれない可能的世界の事物を模倣するのが芸術であるとする理念である。実際、フュースリは、『画法講義』においては現実の対象の再現的描写を重視していない。一貫して、人体プロポーションの様式史と、友人ヨーハン・カスパー・ラヴァター (1741-1801) 著『観相学論』(Essays on Physiognomy) をはじめとする観相学理論の分析に比重が置かれている。フュースリは、古代ギリシア美術以降その様式の多様性は、人間の多様な性格(キャラクター)に対応しているがため、それらの造形要素を適切に組み合わせることで、現実には存在しない可能的人物のキャラクターを模倣できるとする。

第3章「物語とキャラクターの造形」では、以上の造形理論がフュースリ作品にいかに関与されているかを検証する。その実践の上でフュースリがもっとも注目し、影響を受けたのは、ロンドンの代表的な劇場シアター・ロイヤル・ドゥルリー・レーンの支配人かつ俳優デヴィッド・ギャリック (1717-1779) の舞台であった。ギャリックは、フランスの王立アカデミーの画家にして理論家シャルル・ル・ブラン (1619-1690) が確立した感情表現の定型を演技に取り込んでいた。フュースリは、ギャリックの演技を「情念の最高の模倣」と絶賛する。演出家でもあったギャリックは演劇史上画期的な「額縁演劇」形式を確立する一方、彼の劇場の舞台デザイナーであった画家フィリップ・ジェイムズ・ド・ラウザーバーグ (1740-1812) は照明と光学機

器の効果によって超自然現象を現出させる特殊効果を導入した。このような演劇にみるキャラクター表現、舞台効果、舞台空間、さらに当時流行した幻灯やファンタスマゴリアなどの視覚効果を旨としたスペクタクルは、フューサリの明暗効果（キアロスクーロ）と演劇性を巧みに絵画化した造形理論と実践に大きな影響を与えたのである。

第4章「次世代に継承されたフューサリの人体造形手法」では、以上のフューサリの造形理論と作画法を、同時代および続く世代の美術家たちがいかに継承したかを検討する。まずフューサリの親友で、彫版師として彼の出版企画に協力したウィリアム・ブレイク（1757-1827）の観相学に関するテキストとフューサリの『画法講義』の内容が一致していることを指摘し、フューサリの理論がロマン主義時代の物語画家たちの多くに共有されていたことを論証する。ついで、フューサリとブレイクの共通の弟子であるジョージ・リッチモンド（1842-1921）、またリッチモンドと共にロマン主義サークル「古代人」（The Ancients）のメンバーであったサミュエル・パーマー（1805-1881）にもその造形手法が継承されていることを確認する。さらに、フューサリに薫陶を受け、彼の人体造形論を批判的に引用した手引書『絵画・画法講義』の著者ベンジャミン・ヘイドン（1786-1846）、メアリー・シェリー著『フランケンシュタイン』挿絵画家セオドア・ヴォン・ホルスト（1810-1844）ら後代にもフューサリの理論と画法が継承されていることを検証する。ホルストは、19世紀イギリス絵画を担うラファエル前派の旗手ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ（1828-1882）が私淑した画家であり、ロマン主義絵画とラファエル前派を繋ぐ画家

として近年注目されている。以上を以て、フュースリのキャラクター造形論は、ロマン主義時代のみならず継承者たちを通じて、近現代における連続作画の基礎として脈々と受け継がれていると結論付ける。

### 論文審査の結果の要旨

ヘンリー・フュースリは、ロイヤル・アカデミーで教鞭をとり、古典主義的アカデミズムの画家として同アカデミーを牽引した。しかし、アカデミズム画家としての姿勢と、当時隆盛をみた芸術におけるロマン主義的傾向を背景に制作された彼の商業的な目的を含めた作品における奇抜なテーマおよび画風との間には矛盾がある、とこれまで指摘されてきた。すなわち、理性にもとづいて絵画を構築する古典主義と、感性ないしは感情に重きを置いて絵画を描くロマン主義が、彼の作品に混在しているがゆえに、近代イギリス絵画史におけるフュースリの位置づけは難しいものであった。本論文は、フュースリの独自の経歴から導き出された造形に関する問題意識を、まず彼の『画法講義』を中心とするテキストから抽出し、フュースリの造形理念と作画方法の本質を提示、ついで、油彩と素描など実作品においてそれがいかに適用されているかを子細に分析し、文芸が商業的に大きな展開を遂げた当時のイギリスであったからこそ、古典主義的素養とロマン主義的傾向が共存しえたことを論証するものとなっている。広くは、古典主義とロマン主義の対立と共存という文芸上の大きな問題をも示唆

し、それに対する解答を提示する論文であると言えよう。

もとより日本では、フューズリ研究は本格的になされておらず、イギリス近代絵画と言えば、レイノルズやゲインズバラらロイヤル・アカデミーの軸となった画家について、19世紀半ばに台頭し、19世紀後期のフランスにおける印象派と並んで近代絵画を率いたラファエル前派の研究に絞られてきた。1983年に国立西洋美術館で開催された「フューズリ展」は、このような日本におけるフューズリ研究の先鞭をつけたと言ってもよいが、以降の研究はなされてこなかったのが現状である。松下哲也の本論文は、このような研究状況を打開したものである点で画期的であると言えよう。

本論文の構成に沿って検証されているフューズリの物語絵画の作画の手順を簡略化すると以下ようになる。「物語絵画」とは、西欧において神話・聖書・歴史をテーマとする絵画であり、アカデミーに受容された絵画テーマの序列においてはもっとも優れていると位置づけられていた。人間の歴史（History）を優位に位置付けるアカデミックな序列においては、物語絵画の中心は人間存在の描出にある。すなわち、ある状況に置かれた人間の言動と表情、それらの人物たちによって繰り広げられる連続物語を限られた画面に展開する場合、その場面選択や人物配置、そして人物の身振りや表情の表現の巧みさによって「物語」は現実性を帯びる。フューズリは、この「物語絵画」の表現方法として、選択された場面を連続的に配置するという新機軸を打ち出し、それは現代へと脈々と受け継がれているとする本論文は、絵画史のみならずイラストレーション等の近現代商業アートにおけるフ

ュースリの立ち位置を明らかにするものである。

本論文は、以下のようにフュースリの作画方法を明らかにした。1. 観相学の応用によって物語（想像上）の登場人物の身体的特質を設計する（「静の観相学」）。2. 同時代の演劇、身体パフォーマンスに倣い、登場人物の身振りを設計する（「動の観相学」）。3. 同時代の演劇、見世物の照明方法などによる特殊効果を絵画に応用し、登場人物が置かれた状況・情景を表現する。4. 1～3の手続きを経て制作された複数枚の作品を連続的に並べて展示することで、一連の物語の流れを表象する。

本論文はこの作画方法を順次論証する展開となっているが、とくにフュースリの造形理論がいかに理論的に実践されたかを論証する3章には、いささかの難がある。2章において提示された「静の観相学」について、3章では感情、情動を表すための身振り手振りについて「動の観相学」という概念を提示する。その論証のために、ルネ・デカルト（1596-1600）の人間機械論を基盤とした『情念論』、それを受けたフランス王立絵画・彫刻アカデミーの設立者にして画家・理論家であったシャルル・ル・ブランの『感情表現に関する講義』と作画法、さらにイギリス経験主義哲学者デイヴィッド・ヒュームの『人間本性論』中「情念について」で展開される「共感」(sympathy) の概念を援用する。フュースリは確かにジャン＝ジャック・ルソーとヒュームとはパリで知己を得ているが、その理論をフュースリ作品に具体的に適用しうるかについてはさらなる検証が必要である。3章ではさらに、身体パフォーマンスによって「物語」に身体性を具体的に導入したエ

マ・ハミルトンの「アティチュード」を挙げているが、18世紀の哲学・思想家の言説を含め、いまだ咀嚼しきれておらず説得力のある説明になっていない。さらに続けて「夢」「夢想」へとテーマを展開する議論も、上述の哲学・思想的言説との整合性がままならず、具体的な作品解釈へと結びついていない。美術史的には、フュースリのみならず、近代におけるラファエロおよびミケランジェロの受容の問題について未整理である。フュースリがイタリア・ルネサンスの巨匠とされる芸術家の、何を、如何に受容したかを検討するには、ルネサンス研究が不可欠であり、哲学思想分野と同じく、いっそうの研究が望まれる。

以上の検討すべき課題はあるが、まずフュースリの『画法講義』をはじめとするテキストを丹念に読み込み、それと彼の作画方法との対応を検証したこと、さらに、当時のイギリスにおける文芸の潮流の中で、アカデミシャンであるフュースリがいかにロマン主義的傾向を次世代へと継承させたかを明らかにしたことは特筆すべきである。単にフュースリ研究に留まらず、アカデミーと並んで近代の大きな芸術潮流を形成したロマン主義からラファエル前派まで断続的にしか考察されてこなかったイギリス絵画史を、視覚文化史的視点に立って位置づけ、今日のヴィジュアル・カルチャーへと続く造形理論を明らかにした論文として評価できる。

以上、本論文の提出者松下哲也は、博士（歴史）の学位を授与される資格があると認める。



平成29年2月15日

主査	國學院大學教授	小池 寿子	㊞
副査	國學院大學教授	西村 清和	㊞
副査	東京藝術大学准教授	佐藤 直樹	㊞



松下 哲也 学力確認の結果の要旨

下記3名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、  
博士（歴史学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成28年12月19日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	小池 寿子	㊞
副査	國學院大學教授	西村 清和	㊞
副査	東京藝術大学准教授	佐藤 直樹	㊞